会　議　記　録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公開します。

会　　議　　名	令和４年度第２回高松市生涯学習センター等運営協議会
開　催　日　時	令和５年２月７日（火）午後１時３０分～午後２時３０分
開　催　場　所	高松市生涯学習センター２階　大研修室
議　　題	（１）令和４年度高松市生涯学習センター主催事業の実施状況について （２）高松市生涯学習センター開館２０周年記念事業の実施報告について （３）令和５年度高松市生涯学習センター主催事業について
公開の区分	■　公開　　□　一部公開　　□　非公開
上　記　理　由	
出　席　委　員	７人
	田中委員、藤井委員、長尾委員、辻委員、後藤委員、井上委員、藤井（真）委員
傍　　聴　　者	０人（定員５人）
担当課及び連絡先	生涯学習課　生涯学習センター　０８７－８１１－６２２２

会議の経過及び結果
≪次第≫ １　開会 ２　教育局長あいさつ ３　会長あいさつ ４　議事 （１）令和４年度高松市生涯学習センター主催事業の実施状況について （２）高松市生涯学習センター開館２０周年記念事業の実施報告について （３）令和５年度高松市生涯学習センター主催事業について ※　事務局より配付資料に基づき説明後、協議・意見交換 ５　その他 ６　閉会 ≪協議の経過及び結果≫ 事務局から、議事（１）、（２）及び（３）について、説明を行った。 （委員） 自主学習スペースは、どのような層を対象として開放しているのか。 （事務局） 対象は設定していないが、多くは高校生の利用となっている。特に、学校の試験期間と重なる時期の利用が顕著である。また、夏休み・冬休みの期間においては、小・中学生の利用も見られる。平日の夜間には、社会人が、パソコンや書籍を持ち込んで学習している姿も見られる。

（委員）

「ジュニアラジオＤＪ体験　ｉｎ　ｓｕｍｍｅｒ～伝えよう、君の声で～」、「子どもインターネット講座（全２回）」、「こどものための哲学対話」、「生きる力を育てる味覚教育～五感を使って味わってみよう～」のような小・中学生向け講座の参加者が少ないのが残念である。どのくらいの定員に対しての参加人数なのか。また、参加者募集時に、小・中学校への資料の送付等は行っているのか。

（事務局）

定員数と参加者数については、「ジュニアラジオＤＪ体験　ｉｎ　ｓｕｍｍｅｒ～伝えよう、君の声で～」が、定員１０名に対して参加者３名、「子どもインターネット講座（全２回）」が、定員延べ２０名に対して参加者延べ１７名、「こどものための哲学対話」が、定員８名に対して参加者２名、「生きる力を育てる味覚教育～五感を使って味わってみよう～」が、定員２０名に対して参加者６名となっている。補足として、「Ｈｉｇｈ　Ｓｃｈｏｏｌ　ＤＪ～学生ができる地域活性化って？～」については、定員１２名に対し、参加者が１１名となっており、比較的多くの方に参加していただいているが、これは、講師を務めた香川大学Ｒａｄｉｏ１８による、出身校への声かけ等の協力によるところが大きかった。

また、学校への広報については、校長会を通じて、夏休みに開催される子ども向け講座の資料を配布している。

広報高松に掲載できる講座数が減ったことにより、周知方法に苦慮しているところであるが、近年重要視されている「考える力」を養う哲学の講座や、大学生に教えてもらう貴重な機会となるラジオ体験講座等、生涯学習センターの開催する魅力的な講座を、より多くの人に知ってもらうべく、チラシやインスタグラム等、様々な媒体を通じて、広報に努めていきたい。

（委員）

校長会で周知された情報が、どの程度、子どもたちとその家族に伝わっているのか疑問である。今よりもさらに、子どもたちへ伝えてもらえるような工夫はできないだろうか。

（事務局）

生涯学習センターとしても、一人でも多くの児童・生徒の皆さんに参加していただきたいという思いであるが、どんな情報を優先して伝えるかについては、それぞれの学校の最終的な判断を尊重したいと考えている。

（委員）

丁寧に、講座の企画・運営がなされていることが、資料から読み取れた。せっかく良い講座を開催しているのに、その情報がうまく伝わっていないために、本当に参加したい人の耳にも届いていないことが、もったいないと思う。情報を広く届けるために、広報の方法を改善していくべきだろう。

より多くの人の目に触れるような方法として、興味のある人はそこからどんどん情報を得ることができる、ＱＲコードを活用するのはいかがだろうか。何百枚も紙に印刷して配布するコストや、デジタル化している時代の流れを考慮すると、このような形が適しているのではないだろうか。

（事務局）

講座の参加者について、一度講座に参加し満足された方が、複数の講座を受講している傾向にあるため、生涯学習センターとしても、幅広い方に知ってもらうことが大きな課題であると

考えている。周知方法について、更に検討していきたい。

（委員）

香川大学Ｒａｄｉｏ１８によるラジオ体験講座を振り返ると、「ジュニアラジオＤＪ体験ｉｎ　ｓｕｍｍｅｒ～伝えよう、君の声で～」については、参加者を集めるのに苦労したと記憶している。

「Ｈｉｇｈ　Ｓｃｈｏｏｌ　ＤＪ～学生ができる地域活性化って？～」は、香川大学の学生が行っているプロジェクト活動、地域貢献活動の様子を、高校生に見てもらい、それをもとにして、公開収録当日、大学生と高校生が対話する、という形で行ったところであるが、収録本番に向けて大学生と高校生が一緒に準備してきた時間も含め、高校生にとって、大学生と活動する貴重な機会になったと感じている。

（事務局）

生涯学習センターと香川大学との連携講座を開催して、両者色々な気づきが得られたように思う。生涯学習センターとしては、大学との連携講座に対する、市としてのより良い関わり方を考えるきっかけとなった。特に、「Ｈｉｇｈ　Ｓｃｈｏｏｌ　ＤＪ～学生ができる地域活性化って？～」では、大学生に頼る部分が大きく、市の役割が、開催場所と受付の提供に収まってしまっていたと感じている。

市が関わることによって、その講座に提供できるものは何かを考え、大学と市の間で意見を出し合いながら、講座の魅力を向上させていきたいと考える。

（委員）

生涯学習センターの役割として、施設管理やイベントの主催・運営に加え、人と人をつなげてコーディネートする、そのフィールドとなることも挙げられるのではないだろうか。

２０２５年に向けて、中学校の部活動が地域移行しているところであるが、移行の受け皿がなく、ほぼ不可能なのが現状である。生涯学習センターは、例えばこの地域移行の受け皿、或いはフィールドのような場所になれないだろうか。

（事務局）

開館２０周年を迎えたということもあり、高松市生涯学習センターの果たすべき役割について考える時期に差し掛かったと感じている。地域移行の受け皿という役割も視野に入れながら、生涯学習センターのあるべき姿を考えていきたい。

（委員）

自主学習・部活動も含め、学校は、積極的に外部の力を借りる姿勢へと変化している。生涯学習センターには、多様な講座の開催による学びの機会の提供、勉強したい子どもたちへの学習スペースの開放など、子どもたちのための良い環境づくりを期待している。

（事務局）

学生の利用は、施設に活気をもたらすだけでなく、学生にとっては、大人が勉強している姿を目にする良い機会となり、主な利用者である高齢者にとっても、学生の学習に対する姿勢から刺激を受ける機会となっている。生涯学習センターが、“生涯学習”を媒体として、人と人をつなげるフィールドになれたらいいと思う。

（委員）

小・中学校では、地域の高齢者を学校へ招き、お年寄りの持つ知恵を教えてもらう機会が作られている。特に、親と子どもだけの家庭で育ち、高齢者の生き方をあまり知らない子どもや、

孫と離れて暮らしている高齢者にとって、互いの姿が刺激になっているようである。子どもと高齢者とが、人と人とが関わると、お互いに学び合うことができるのだと感じている。

（事務局）

今後の施設のあり方を検討する際に、頂いた意見を参考にしたい。

（委員）

一つ目に、生涯学習センターで、色々な生涯学習に関する事業の情報を集約できないだろうか。例えば、高松市の主催している事業をすべてまとめて知ることができれば、市民は、参加したい講座がどこの施設で開催されているか調べる手間が省ける。さらに、そのデータを他施設と共有しておけば、施設側としても、最適な講座をスムーズに案内できると思う。

二つ目に、開館２０周年記念事業として、香川大学の長谷川修一特任教授による、ジオ（地上）についての講演会を開催したとのことであるが、その関連として、例えば、天文に関する講座を実施してはいかがだろうか。

（委員）

プラネタリウムのニーズがあるのではないか。

（事務局）

まず、生涯学習センターで、色々な生涯学習の情報を集約し、市民が閲覧、検索等をできるようにならないか、とのことであるが、生涯学習センターが、今後も、高松市の生涯学習の中枢拠点としての役割を担っていくためには、生涯学習に関する講座の情報を集約し、提供していくべきだろうと考える。

次に、生涯学習センター開館２０周年記念事業での長谷川修一特任教授の講座を発展させ、天文の講座を実施するというのは、高い興味・関心を得られる良い企画であると思う。一方で、生涯学習センターでプラネタリウムを実施することや、天文という専門性の高い講座を開催することについては、予算、講師依頼における課題等も考慮し、検討していきたい。

（委員）

こども未来館には、プラネタリウムが設置されていたのではないだろうか。

（事務局）

こども未来館と生涯学習センターとの共同企画等、色々な方法を考えながら、講座として実現可能か検討したい。